



50th since 1975

ChildFund Japan

感謝を胸に、ともに未来へ



受益者の声	02
ご挨拶	04
ストーリー	06
特別座談会	10
関係者メッセージ	14
支援者寄せ書き	18
歴史	
前史	20
2025年3月までの歴史	21
2025年3月以降の歴史	22
写真ギャラリー	26
展望	28
資料	
プロジェクト一覧	30
支援チャイルド数・支援地域	32



受益者の声

Voices of
beneficiaries

フィリピン



私は17歳のシェイカです。スポンサーシップ・プログラムの支援を受けて成長することができ、私は幸せでした。多くの友だちや思い出を得て、努力の大切さを知ることができました。スポンサーの方々のおかげで、学校に通い、勉強や課外活動に打ち込むことができました。私は今度、ハイスクールを卒業します。そして、法律の専門家になる夢に近づいています。一番の目標は家族の生活を守ることです。すべてに感謝します。

ぼくはリホックです。いつもご支援をありがとうございます。学用品が入ったカバンを持って、楽しい学校生活を送り、支援を受けるチャイルドの会では、新しい友だちと多くのことを学ぶことができ、とても幸せです。勉強したり、休みに絵を描いたり、友だちと楽しく遊ぶことが大好きです。大人になったら、警察官になって人を助けたいです。一生懸命がんばります。スポンサーの皆さまに、神様の恵みがありますように！

フィリピン



ネパール



ナマステ！私はジャムカママです。スポンサーシップ・プログラムに参加することで、私と私の友人は、定期的に学用品（ペンや鉛筆、ノートからカバン、制服まで）を受け取ってきました。そのおかげで、質の高い教育を受けられ、私たちの学習も進んでいます。また、コミュニティ学習センターの建物も建設されました。私は将来、教師になるという夢を叶えるために、一生懸命勉強しています。ご支援に感謝します。

こんにちは。私は小学校の校長チジャ ラウトです。チャイルド・ファンド・ジャパンから多大な支援を受けていることに、心から感謝しています。授業方法の改善や就学前教育（ECD）の立ち上げへの協力、水道設備や障がい者用トイレの整備などにサポートをいただきました。教員への講習も感謝しています。生徒たちは、学校にきちんと通い、学習成果も上がっております。多くのご支援をありがとうございます。

ネパール



スリランカ

私はスリランカのパウストラです。チャイルド・ファンドの手厚い支援によって、私は勉強に専念でき、学業で優秀な成績を収めることができました。また、人生で特に困難な時期に、手術の費用を負担していただきました。生活改善のために、ヤギを提供していただいたこともあります。その結果、私は大学への入学が許可されました。大きな夢を抱き、多くのことを達成できる力を与えてくれた支援に心から感謝しています。



スリランカ



私はアリシャです。私はこれまで、支援をいただき、試験勉強や外国語の習得に励んできました。チャイルド・ファンドのユース・プログラムに参加したことで、私は、内気さを克服し、自信とリーダーシップを得ることができました。人生設計のセッション、コンピュータ研修、災害対策訓練などを通じて、私は様々な面で成長できました。これらの経験から私は、自分の進むべき道を明確に定め、看護師になる決意を固めました。

スリランカ

私は4児の母であるナカルシュワリです。チャイルド・ファンドの「社会性と情動の学習プログラム (SEL クラス)」が、私の娘シュリヤニの人生を変えてくれました。彼女はかつて、情緒の不安定さや恐怖、学校での人との結びつきの欠如に苦しんでいました。しかし、SEL クラスに入学したことで、彼女は自己認識を深め、自信を持ち、有意義な社会的つながりを築く能力を身につけました。こうした支援の継続を心から願っています。



日本



中学3年生のT.M.です。フレンドリースペースは、生徒たちが学び、楽しみ、成長する場所です。様々な事情を抱える生徒が、熱心な先生たちに導かれて、弱点を克服することができます。ここでは、生徒が好きに過ごせます。静かに勉強したり、下級生と遊んだり、誰にとっても快適な場所です。私はここで学び、自信をつけ、努力の大切さを学びました。私は、将来のために努力をし、ここで得たことを活かしたいと思っています。

ご挨拶

50年の歩みに感謝して

チャイルド・ファンド・ジャパン理事長
日本基督教団銀座教会牧師
高橋 潤



1975年4月、社会福祉法人基督教児童福祉会（CCWA）の国際協力部門として、国際精神里親運動部が設置され、2005年3月には、新しい国際的な組織チャイルド・ファンド・ジャパンが設立され、独立しました。国際精神里親運動部創設から50周年を迎えることができました。

忘れてはならない前史は、87年前の1938年に、米国バージニア州で創立され、約10年間、日中戦争で肉親を失った中国の子どもたちを支援したChina Children's Fund。第二次世界大戦後の1948年から、日本の子どもたちを支援するためにChristian Children's Fund（CCF）と名称変更し、さまざまな支援がなされたこと。このCCFの日本事務所として発足したのが、社会福祉法人基督教児童福祉会です。約26年間、アメリカやカナダの支援（約56億円）により、日本のおよそ9万人の子どもたちが助けられました。同支援は、和泉短期大学、児童養護施設バット博士記念ホームも受けています。

1975年、CCWA国際精神里親運動部は、CCFによる多くの子どもたちへの支援に感謝し、この感謝を「順送りの恩返し」にしよう、「分かち合って、ともに生きること」こそが26年間の善意に対する恩返しになる、との考えから生まれました。関係者たちは、CCWAのスポンサーシップは、社会福祉法人としてではなく、NPO法人としての方がふさわしいと考え、2005年より、同じ精神と同じ働きをチャイルド・ファンド・ジャパンが引継ぎました。

感謝の「順送りの恩返し」はフィリピンの子どもたちへの支援として始まり、50周年を迎える現在まで、多くの国の子どもや大人たちとの絆となってきました。

CCFから受け継いだ、世界の子どもたちを支援する原動力は、基督教の隣人愛の教えです。「イエスはお答えになった。「第一の掟は、これである。『イスラエルよ、聞け、わたしたちの神である主は、唯一の主である。心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。』第二の掟は、これである。『隣人を自分のように愛しなさい。』この二つにまさる掟はほかにない」（マルコによる福音書12章）

主イエス・キリストが、神を愛することと、隣人を愛することを弟子たちに教え、この愛の教えが世界の教会、施設、学校に広がり、神の愛の実践となって、隣人愛が広まりました。前史を想起し、50年を振り返るとき、神に愛されていることへの感謝と、隣人を愛する喜びを継承してこられたことが、私たちの宝であると感じます。

50周年を迎えた2025年、世界の子どもたちの環境の著しい変化に対して、子どもたちがより安全に健やかに成長できる環境を整えるとともに、どんな時代でも、子どもを愛する神の愛に学び、子どもを愛する心を、共通の宝として再確認したいと思います。

50年を振り返るとき、多くの方々のご支援、ご協力を賜ったことを、心より感謝いたします。支援者、ボランティアの方々の協力が、私たちの活動の土台です。世界各国のアライアンスの一員として、協力関係を深めるとともに、子どもたちの成長と笑顔を思いながら、支援者の方々に子どもたちの現実をお伝えすることで、「順送りの恩返し」を今後も継続してまいりたいと願っています。

皆さまには、引き続き温かなご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

子どもと家族、地域を支援してきた チャイルド・ファンド・ジャパン50周年を祝して

チャイルド・ファンド・アライアンス事務局長
メグ・ガルディニエール



世界 70 カ国で子どもを支援する 11 の団体からなるチャイルド・ファンド・アライアンスは、3千万人近くの子どものとその家族とともに活動してきました。この中でも、チャイルド・ファンド・ジャパンは、子どもへの暴力と搾取の禁止、緊急事態や災害への対処、子どもと家族と地域の持続可能な発展を目指すことで、重要な役割を果たしています。

チャイルド・ファンド・ジャパンが独立した子ども支援組織となって、50 周年を迎えました。その始まりは、日中戦争で住む場所を追われた子どもを支援した 1930 年代にさかのぼります。その後、第二次世界大戦によって困窮した子どもと家族の支援、特に児童養護施設を拠点とした社会福祉事業が、アジアで発展し、1975 年に、独立した組織となりました。日本、フィリピン、ネパールなどで、効果的かつ持続可能な方法で、困難な中にある子どもと家族を支援し、一対一で人をつなぐありかたは、私たちの文化となっています。

2005 年にチャイルド・ファンド・ジャパンがアライアンスに加盟したことで、私たちは強力なメンバーを得ました。2015 年には、ネパールでマグニチュード 7.8 の地震が起きました。このとき、チャイルド・ファンド・ジャパンは、ネパール事業の年間予算の5倍に相当する「ネパール大地震緊急・復興支援プロジェクト」を立ち上げました。アライアンスの構成団体に即座の支援を求め、食料の供給、避難所の設置、子どもの居場所や学習の場、「水・トイレ・衛生」の確保を可能にし、何千人もの子どもとその家族を助けたのです。

また、チャイルド・ファンド・ジャパンは、2016 年の「世界人道サミット」に向けて、「みんなの仙台防災枠組」と呼

ばれる子ども向けの防災マニュアルの作成のために出資しました。これは 2022 年に改訂され、アライアンスも加盟する「気候変動と子ども支援」を通して、広く活用されています。2017 年からは、子どもへの暴力を終わらせ、子どもの権利を保障する 6 つの子ども支援組織による「Joining Forces」においても、重要な役割を担ってきました。

2019 年にはネパール事務所が、オーク財団の出資する「子どもにやさしい説明責任プロジェクト」に参加し、子どものセーフガーディングマニュアルの子ども向け版の作成に協力しました。チャイルド・ファンド・ジャパンは最近では、アライアンスが 2022 年に始めた「WEB Safe & Wise キャンペーン」のために、子どものネット上の安全の確保を推進しています。関係者と協力して、子どもへの性暴力を防止するための法改正に関わるとともに、「オンラインゲームにおける子どもと若者の実態とグルーミング（性的手なづけ）」に関する調査を行い、ネット上で、調査した日本の子どもたちの約 8 人に 1 人が、性的画像を暴露されたり、実際に会うことを求められたりするなど、肉体的精神的な被害を受けていることを明らかにしました。

世界が未曾有の危機にある中、子どもの環境は深刻です。私たちはチャイルド・ファンド・ジャパンの継続した支援に感謝しています。チャイルド・ファンド・ジャパンがこれまで、世界の重要な地域で、常に迅速に子どもたちの緊急事態に対応し、アライアンスの活動に貴重な協力を実施してきたことは、私たちの救いと誇りでもあります。これまでの 50 年間と同様に、今後の 50 年間も生産的で意義深い活動が継続することを祈ります。

Story 1

支援チャイルドたちが担う住民組織の活動

チャイルド・ファンド・ジャパン協力団体
聖フランシスコ・センター



プロジェクト 1044「聖フランシスコ・センター (SFC)」が、チャイルド・ファンド・ジャパンのスポンサーシップ・プログラムを通して、オーロラ州サンルイス市の 5 つの地域で、地域開発支援を始めたのは 2001 年 8 月のことです。

スポンサーシップ・プログラムの目標の一つである「社会問題に取り組み、人間の尊厳を促進できる持続可能な住民組織の形成」の事例として、2010 年にプロジェクトが始まったカサマカ協同組合があります。カサマカ (KASAMAKA) は 2013 年 11 月、政府機関の「協同組合開発局」に正式に登録され、「子どもの権利と保護の促進」に関して、継続的に SFC の積極的かつ機能的なパートナーとなっています。その事例は以下の通りです。

- ・文学作品やビジュアル・アートなどを通して、子どもの権利に関する一連の意識向上キャンペーンを継続している。彼らは現在、子どもの権利と保護のアドボカシーを広める研修を主催し、オーロラ州政府から講師派遣の対価を受け取っている。
- ・会員の子どものために、子どもたちの権利と保護を提唱する活動を行っている。
- ・ラジオ放送を通じて、コミュニティの外の子どもたちに、子どもの権利と保護される権利について啓発をはかっている。
- ・子どもの権利の小冊子の発行は、スポンサーシップ・プ

ログラムで得た知識や姿勢、スキルを、具体的かつ目に見える形で示す結果につながった。

- ・オーロラ州サンルイスのすべての対象校に、「子どもの権利掲示板」を設置した。
- ・「貯蓄動員プロジェクト」で、すべてのチャイルドに、少額の学校手当から貯蓄することを奨励し、年 2 回のコインバンク開設を通じて貯蓄と儉約の価値を教えている。
- ・粘り強い啓発活動の結果、2024 年 12 月 31 日現在、現在と元のチャイルドを含む 1,066 人の会員が、貯蓄預金を積み立てている。

<カサマカのメンバーからのコメント>

- ・小学 3 年生の時にリーダーシップ研修に興味を持ち、5 年生のときには、センターからアテネオ・デ・マニラやイロイロ市などのセミナーに派遣されました。感謝の気持ちを表すために、私は今も、他の子どもたちにトレーニングを提供しながら、自分のスキルを磨き続けています。(マリエル、大学生)
- ・将来のためにお金を貯める方法を教えてくださいました。今、私はすでに家庭を持っていますが、お金の大切さを娘にいつも教えています。(ライカ、教員)

Story 2

地域一体となって変えた、子どもたちの学びの場

チャイルド・ファンド・ジャパン ネパール事務所
Manoj Kumar Tharu



ネパールでは、すべての子どもに質の高い教育を提供するために、多くの困難と向き合ってきました。特に、山岳地帯の遠隔地では、資源の不足や学校の設備の不十分さなどが、子どもたちの学習環境を厳しいものとしています。

しかし、こうした困難の中でも、支援を通して、希望をもって前進している地域があります。シンドゥパルチョーク郡での教育改善の取り組みも、その一つです。

私たちは、2016年から2022年にかけて、この地域にある7つの公立学校で、合計554人の子どもたちが、より良い学習環境で学べるようにするための支援を行ってきました。

この地域の課題は、資源の不足や設備の老朽化だけではなく、2015年のネパール大地震の被害もあります。こうした課題を解決するため、私たちは教育環境改善のプロジェクトを進め、学校・地域住民・地方自治体が一体となって、活動に取り組んできました。

支援によって、子どもたちの学力は大きく向上し、平均成績は38.4%から46.1%へと約8ポイントも上昇しました。教師が子ども主体の指導方法を学び、低コストで使える教材を工夫・開発するようになったことが大きな理由です。

出席率も80%から86%へと向上しました。学用品の支給により、家庭の経済的負担が軽くなっただけでなく、親と先生が話し合う機会が増えたことで、親の意識も変わり、子どもたちを学校へしっかり通わせよう、という動き

が強まったことが大きな理由です。

「スポンサーシップ・プログラムに参加して、教育がどれほど大切か、実感しました。手紙の交換をしたり、学用品を受け取ったり、色々な活動に参加できたおかげで、自分自身も成長できました。支援のおかげで、女の子の私も、高校を無事に卒業することができました」。支援を受けたチャイルド、マンジュさんは支援の成果をそう語っています。

この他にも、校舎の建設や修理、水飲み場の設置、トイレの新設など、インフラの支援も実施しています。

さらに、子どもたちにとって大きな励みになったのが、日本のスポンサー様との手紙のやりとりです。「外国に友だちがいる」。それは、世界の広さを知る機会にもなり、子どもたちは自信を持つようになりました。「日本のスポンサーさんとの手紙の交換が、自信につながり、勉強を続ける励みになりました。また、学用品や制服の支援が家計の負担を減らしてくれたので、勉強に集中できました」（ラビナさん）

シンドゥパルチョーク郡は、すでにスポンサーシップ・プログラムから卒業し、自立していますが、学校では今も、教育改善の工夫が続いています。

支援校の一つの校長先生、シャンカルさんは支援の影響を高く評価しています。「プロジェクトが終わった今でも、先生たちは研修で学んだ指導法を実践し続け、親たちも学校との関わりを深めています。子どもクラブの活動も活発で、学校行事を主導するようになりました」。支援がもたらした変化が今も続いていることは、未来への希望です。私たちは、こうしたスポンサーシップ・プログラムでの支援を、より多くの子どもたちに届け、より良い教育の機会を提供し続けられるようにと願っています。

Story 3 教育こそが未来を変える唯一の道

スリランカの子供 チェタナ



私は、スリランカのプッタラム県で育ったチェタナです。4人家族の長女として生まれましたが、小さい頃から生活はとても厳しく、家族は家計のやりくりにも苦労していました。父は農業をしていましたが、収入は収穫期にしかなく、さらには、紛争や野生のゾウによる被害で、作物がだめになってしまうことも多く、安定した収入を得るのはとても大変でした。それでも私は、教育こそが未来を変え、家族を救う唯一の道と信じ、勉強をあきらめませんでした。

私の村では、都会の学校のような教育は受けられません。先生の多くは臨時講師で、経験が浅く、教え方も分かりにくいことが多いです。図書室もなく、教室の設備も整っていません。私は「もっと広い世界を知りたい」「外国語、特に日本語を学んでみたい」という夢をもていましたが、村には外国語を学ぶ十分な環境はなく、教材を手に入れることも難しい状況です。

2006年、私の人生に転機が訪れました。チャイルド・ファンドのスポンサーシップ・プログラムのチャイルドになれたのです。この支援によって、就学前の栄養補助、学費や学用品、課外活動など、多くの支援を受けることができました。中でも、私のスポンサーさんが日本の方で、その方の支えは、私がそれまで想像もできなかったほどに生活を変えてくれました。スポンサーさんの応援の言葉も、私にとってとても大きな励みでした。

そして2019年、チャイルド・ファンドの支援のおかげで、全国統一試験（GCE-O レベル）でとても良い成績をおさめることができ、大学に進学することができたのです！

大学では、日本語を含む様々な分野について学び、知識をさらに広げました。

また、チャイルド・ファンドのアントレプレナーシップ研修（起業家研修）にも参加しました。そこでは、パティック（スリランカの伝統的な染め物）などについて、多くの知識やスキルを得ることができました。ものづくりの楽しさを知り、自分でも何かを始めたいという気持ちが強くなりました。

そして私は、日本のホテル業界での仕事に応募し、見事採用されました！ ずっと思い描いていた、日本で働くとい



成田空港で。「記念写真ではなく、私の日本での旅の始まりです」

う夢が現実になった瞬間でした。

今の私の夢は、広がっています。いつかスリランカに戻り、自分のレストランを開きたいと考えているのです。私のように限られたチャンスしかもたない若者たちに、仕事を提供したい！ レストランを開くということは、私にとって単なるビジネスではありません。私を支えてくださった方々への恩返しでもあります。レストランが、日本とスリランカ、両方の文化が息づく、温かい場所になればと思っています。

Story 4 歩みとともに

東日本大震災 緊急・復興支援事業
元プロジェクトマネージャー 船戸義和



2011年3月11日の東日本大震災直後から、アライアンスに加盟する各国11団体や、日本各地の協力者からの寄付に支えられ、約2年間、緊急・復興支援活動を行いました。

団体初となった国内支援は、3月16日に実施が決定され、物資の搬送等を経て5月から岩手県大船渡市で地域に根差した活動を開始しました。国際協力NGOとしての経験を活かし、「モノ」ではなく「人」中心の支援を行うべく、避難所35カ所、仮設住宅124軒を訪問して、被災者のお話を伺うことから始めました。これ以降、酪農学園大学と青山学院大学を中心とした学生ボランティア延べ304人と教職員、常駐職員3名らが、ともに活動を形づくりました。なお、大船渡での出会いと経験から、学生有志が学生団体「Youth for Ofunato」を設立し、代替わりしながら14年後の現在も活動を継続しています。

私たちの活動は、主に次の3つです。

プロジェクトⅠ：仮設住宅団地のコミュニティ形成

仮設住宅では、人のつながりが少ないため、安全面に不安を感じ、「子どもを外で遊ばせることができない」という親の声があったほか、住民同士の助け合いが生まれにくい状況でした。そこで、住民と学生が協力して木製ベンチをつくり、交流の場となるように団地通路に設置しました。丈夫で持ち運べる構造としたことで、用途によって場所を自由に変えられ、住民同士のつながりづくりに役立ち

ました。作成したベンチは計300台ほどです。

私たちは、ベンチも活用した食事会や納涼祭を実施し、交流の機会を数多く設けました。また住民が、主体的かつ継続的に関わるコミュニティの形成にも携わりました。この視点から生まれたのが共同農園「友結（ゆうゆう）ファーム」です。市内最大（308戸）の仮設住宅団地で、住民がいつでも行ける畑を団地脇に整備しました。参加者は共同作業を通じて親睦を深め、野菜を売り歩くことで他の住民にもつながりを広げました。

学生が、住民同士のつなぎ役、職員が全体のコーディネート役となることで、住民が主役の「協働」が実現しました。人員と時間を最も多く注いだ中心的プロジェクトでした。

プロジェクトⅡ：子どもの生活充実

読書を通じて子どもの心を育てる活動を行う「おはなしころりん」（大船渡市、2003年設立、2016年NPO法人化）と協働して、読み聞かせ講座を実施しました。期間限定で支援する私たちにとって、地域団体との協働は、活動の持続性という視点から非常に大切な出会いとつながりでした。898人の受講者が読み聞かせの基礎技術を学んだこと、代表の江刺さんが私たちを「仲間」と呼んで下さったことが大きな成果でした。

また、震災前から続く少年野球大会の運営支援、小中学校22校の卒業アルバム制作費補助などの事業も実施しました。

プロジェクトⅢ：子どものこころのケアとグリーンワーク

子どもの周囲の大人（保護者や保育士）が子どもの心の状態を知り、サポート役となるための支援を行いました。さらに、ルーテル学院大学と連携し、専門家による個別相談や講習会、保育士自身の被災体験や不安を共有しあう機会を提供しました。

子どもたちへの支援を通して紡がれた、心と心の触れ合い

チャイルド・ファンド・ジャパンにかかわりの深いお三方に50年を振り返って語り合っていました。

座談会参加者

学校法人和泉短期大学 学長 佐藤守男氏

社会福祉法人基督教児童福祉会 バット博士記念ホーム統括園長 宮本和武氏

特定非営利活動法人チャイルド・ファンド・ジャパン元事務局長 小林毅氏

ファシリテーター

特定非営利活動法人チャイルド・ファンド・ジャパン理事、

静岡県立静岡がんセンター 疾病管理センターよろず相談 主幹 医療ソーシャルワーカー 御牧由子氏



Christian Children's Fund (以下、CCF) から引き継いだ志とはどのようなものだったのか

御牧 このたびの座談会は当団体が50周年を迎えるにあたり、「子どもたちへの支援を通して紡がれた、心と心の触れ合い」について、これまでの歴史を振り返り、現在、そして未来を見据えながら、それぞれの立場で語っていただければと思います。チャイルド・ファンド・ジャパン (ChildFund Japan: 以下、CFJ) の活動の原点となった CCF とはどのような団体だったのでしょうか。

小林 私は社会福祉法人基督教児童福祉会 (Christian Child Welfare Association: 以下、CCWA) の国際精神里親運動部 (CFJ の前身団体) に入職した際、CCF は

中華児童福利会: China Children's Fund という、日本の侵略によって傷ついた中国の子どもたちを救済する団体の活動から始まったと聞き、ショックを受けました。

宮本 牧師であり、長年、難民救済事業や募金活動を行ってきたカルビット・クラーク博士とヘレン・クラーク婦人はアジアへの支援を検討されました。1951年にCCF理事会は国際的児童福祉援助団体として、名称を「基督教児童福祉会」(Christian Children's Fund)と改称しています。翌年1952年9月にCCFからの支援を日本の子どもたちに届ける役割を担う、CCWAが設立されました。当時の資金は100万円で、それで法人格を取りました。

小林 一番多いとき、CCWAは93もの施設に支援をし

ていたと聞いています。

宮本 スポンサーの方々からは、最初、子ども一人あたり 2 ドルを出資していただいていたのですが、途中から 10 ドルに増額されました。その 4 分の 1 が事務経費、4 分の 3 を各施設に配ったのです。社会的養護の措置制度が整う昭和 37 年までは、国や都道府県からの資金援助はありませんでした。CCF の支援は施設の存続にも大きな意味がありました。

小林 その当時、ある児童養護施設の職員は、朝起きて大八車を取り出して街を回り、その日の子どもたちの食糧を調達していたそうです。そのような中で、アメリカの団体から支援金が定期的送られてくるのは、天からマナ（神が天から降らす恵みの食べ物）が降ってきたような印象を持ったと聞いています。また、CCF の支援の背景には、子どもが与えられている命を完全に生きられるように、という願いがありました。子どもたちへのケアの質にも資金が投じられ、1956 年に福祉従事者の現任訓練機関・バット博士記念養成所が開設されました。これが和泉短期大学の前身となっています。

宮本 CCF がそのような現任訓練に力を入れたのは、日本だけです。その当時、活動に携わった方々が諸外国ではどのように子どもや家族のケアをしているか視察をして、バット博士記念ホームには最初からソーシャルワーカーと栄養士を置いたのです。

御牧 子どもたちを施設で養うことだけではなく、子どもたち一人ひとりの命が今後にきちんとつながっていくように、子どもたちへの教育、ケアの質に心を砕いてこられたのですね。



佐藤守男氏

佐藤 戦後の戦災孤児の命、衣食住を中心に支援を続けたのですが、それがだんだんと足りてくると、今度は子どもたちをどうやって育て、教育し、将来幸せになれるようにしていくか、ということに焦点を当てるようになっていきました。保育士の資質の向上が現場から求められ、CCF の

支援により現任訓練の講習会が始まりました。それが基になり、1960 年に日本で初めての入所型の児童福祉施設保母養成機関・玉川保母専門学院が創設されました。

CCF の理念を日本の児童福祉の実践、教育・研究等の事業においてどのように発展させてきたか

御牧 CCF の支援が終結する 1 年前の 1974 年に CCWA のスタッフと支援を受けていた施設の施設長の方々がアジア諸国を視察し、今度はアジアの貧しい子どもたちを支援することに舵を切ったと伺っています。なぜ、日本発信でアジアの子どもたちへのスポンサーシップ・プログラムを開始したのか教えていただけますか。

小林 のちに CCWA の国際精神里親運動部を設立された大谷嘉朗先生と 10 名の方々が台湾、香港、フィリピン、タイを視察し、日本でケアしている子どもたちと比べても、現地の子どもたちの状況は厳しすぎるとショックを受けられたそうです。大谷先生は「順送りの恩返し」を行うために、法人に国際精神里親運動部を新たに作り、アジアの子どもたちを支援することを提案されました。驚いたことに、支援金を送ったフィリピンの子どもたちは 1975 年 4 月時点では 67 名でしたが、その年度の終わりには 403 人に増えていたのです。1 年間で、新たなスポンサーが 300 人以上も集まったのです。ライオンズクラブやロータリークラブ、キリスト教関係の施設、学校、教会等から協力をいただきました。ボランティアとして活動に協力して下さった方々も多くおられました。

御牧 CFJ の 2012 年度年次報告書で元理事長の深町正信先生が、CCWA 創立 30 周年記念誌に収められている大谷先生の講演録の「生きていく喜びを共にすると同時に、また悲しい者と共に悲しむという、『心と心の触れ合う運動』がスポンサーシップ・プログラムである」という一文を紹介しておられました。和泉短期大学は「キリスト教信仰に基づく教育と人格形成」を建学の精神とする、日本で唯一の「児童福祉学科」単科の短期大学と伺っています。このようにキリスト教信仰に基づいた活動をアジア諸国で展開している CFJ について、佐藤先生は教育者の立場としてどのように捉えておられますか。

佐藤 和泉短期大学では、学校として CFJ のスポンサーシップの活動に協力してきました。また、CCF から引き継いだ「子どもたち一人ひとりを大切にする」という理念に

基づき、児童養護施設に入所している子どもの保育だけではなく、子どもと家庭、地域とのつながりを視野に入れたソーシャルワークを展開することのできる人材育成を目指してきました。このような目的で、社会福祉士国家試験受験資格に必要な指定科目（18科目）を履修できる社会福祉コースを1988年4月から2002年度まで設置しました。現在、本コースは休止していますが、児童福祉学科の中に「ヒューマン・ソーシャルワーカー」という独自の資格を作り、乳幼児から高齢者までトータルにケアできる人材を育てる体制を整えています。幸いにも卒業生の9割以上は、子どもの保育や福祉の現場に就職しています。これは、通常の4年生の大学などではあり得ない数字です。

御牧 福祉の現場で働きたいという志を持った方々が多く入学され、2年間の学びを重ね、保育や福祉の実践に赴かれるということでしょうか。

佐藤 家族に勧められて入学してくる学生も多いのですが、授業の中で4回ぐらい実習を経験したり、先生方から色々なアドバイスを受けたりしていくうちに、そういう意思を固める学生が多いです。ただ残念なことに、近年、児童福祉の仕事をしたいという学生が少なくなっています。保育、介護や福祉の人材不足は全国的な喫緊の課題となっています。

御牧 2005年4月、国際精神里親運動部は、国際協力を行う組織として法人形態を見直し、特定非営利活動法人チャイルド・ファンド・ジャパン (CFJ) に変更しました。



御牧由子氏

子どもと親、その家族が生活をしている地域をトータルで支援することを目指しました。この考えは、今も引き継が

れています。少し話題は変わりますが、CCFにはスポンサーから子どもに手紙やカードを書く仕組みがあります。それを受け取った子どもたちはスポンサーに返事を書くのですが、これは簡単そうに見えて、そうではありません。子どもたちは、海の向こうにいるスポンサーのことを、なかなか具体的にイメージできませんよね。

小林さんにお聞きしたいのですが、CCFを源流とするCCWAが、バット博士記念ホーム、和泉短期大学、CFJへと枝分かれし、発展を続けてきましたが、その過程で関係者はどのようなことを大切にしてきたのでしょうか。

小林 CCFの日本での活動は、とても幅が広いです。国際精神里親運動部の活動の初期の頃より、

子どもと親、その家族が生活をしている地域をトータルで支援することを目指しました。この考えは、今も引き継が

れています。少し話題は変わりますが、CCFにはスポンサーから子どもに手紙やカードを書く仕組みがあります。それを受け取った子どもたちはスポンサーに返事を書くのですが、これは簡単そうに見えて、そうではありません。子どもたちは、海の向こうにいるスポンサーのことを、なかなか具体的にイメージできませんよね。

宮本 スポンサーシップは、支援する側とされる側の単なるお金のやり取りだけではなくて、手紙を通じたお互いの触れ合いが大切だと、CCFの関係者は考えてきました。それは今も変わりません。まずこちらが、支援へのお礼の手紙を書く。そして、支援した方々からもご返事をいただく。また施設職員から子どもたちへの教育の一環として、お礼のお手紙を書きなさいと指導しています。けれども、子どもたちに対して、そこを強要するのは、**宮本和武氏** 本当にキリスト教的な働き



宮本和武氏

なのか、とも思います。「右手のしていることを左手に知らせるな」（人に親切にする時は、黙って、周囲に知られずにしなさい、の意）という聖書の御言葉の通り、無償性こそが大切なのではないかという気がします。

小林 その通りだと思います。スポンサーと支援される子どもをどのようにつないだらよいかと、関係者は様々な工夫を重ねてきました。一つは、機関紙などで子どもたちを取り巻く現状を詳しく伝える努力をしてきました。もう一つは、スポンサーがフィリピンの支援地域を訪ね、交流する親善訪問です。子どもたちがどういう状況の中で、どんな生活をしているのか、家族の状況等をスポンサーが実際に肌で感じる活動を長く継続してきました。それと、日本の施設に入所している日本人の子どもたちが海外の支援施設に行き、現地の子どもの人たちと触れ合う機会も設けています。あるとき、施設での暮らしに不満を持っている高校生がいました。その彼がフィリピンに行き、現地の人々と交流し、自分よりも厳しい生活状況に置かれている高校生が、なぜこんなに明るく前向きに生きているのだらうと、自分

の生き方を振り返るよい機会になったのです。

御牧 海外の子どもへの支援を通して多様な文化や生活に触れて、それが支援者自身の価値観を見直すきっかけや心が豊かにされることにつながっているのですね。

小林 もう一つお話ししたいことがあります。先ほど、戦争のことに触れましたが、大谷先生の意識の中には、戦争責任という感情が強くありました。日本が担うべき責任の一端として、アジアの子どもたちへの支援を行いたいという思いがあったのです。そして、活動を始めてみたら、戦争を経験した日本のたくさんの方々が、スポンサーになってくださった。自分たち日本人がやったことに対して責任を感じて、これからはフィリピンの子どもたちを支援したいという方が、多数おいでになったのです。

今、世界情勢が、平和と逆行しています。その中で、国境を越えて人を思う。平和を構築するために貢献する。そうしたことが大切だなと、つくづく感じます。

それぞれの立場における今後のチャレンジと CFJ に期待すること

御牧 これまでのお話も踏まえながら、最後に、バット博士記念ホームの働きの方向性、和泉短期大学の今後のチャレンジ、そして、CFJ への期待を教えてくださいませんか。

宮本 バット博士記念ホームと CFJ はもともと同じ法人であったことから、私たちも積極的にスポンサーシップを継続したいと思っています。その一環として、現在7名の海外の子どもたちの生活を支えています。これからも、2つの法人が連携して、共に祈りを捧げながら、子どもたちを支えていきたいですね。キリスト教の精神を持って。

佐藤 和泉短期大学では、スポンサーシップの継続だけではなく、今後、学生の教育の一つの手段として、2つの団体の交流ができればと思っています。具体的には海外の子どもたち、家族や地域への支援について、ぜひ学生たちに紹介していただけたら嬉しいです。

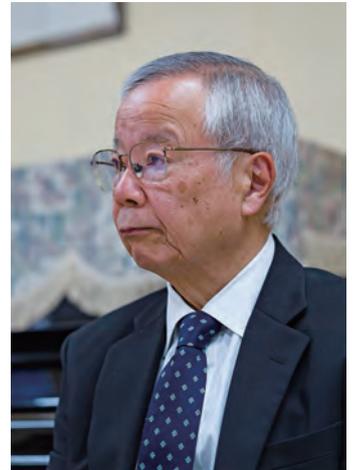
小林 ラリー・トムソン先生が理事をなさっていた時、フィリピンのハニワイという場所に視察に行かれ、現地で活動のオリエンテーションを担当した方がセンターの職員ではなく、住民の代表であったことに驚いておられました。また、協同組合に熱心に取り組んでいる方からも話を聴き、多くの発見があったそうです。そこからトムソン先生は、私たちは今まで、国際社会に関して「インターナショナル」

と表現していたけれど、これからは、国際ではなく国境を越えた「トランスナショナル」な時代にならないといけない、と話されていました。

この問題提起は、今も有効だと思います。特に近年の世界をみると、諸外国では自国優先という声が大きくなっています。そのような厳しい状況の中で、CFJ には国境を越えた人と人との結びつき、ケアや支援のあり方、サービスの展開の仕方などを不断に探究し続けてほしいと思います。

それから、私が事務局長のとき、支援者の方々に子どもたちの“貧しさ”をどうやって説明しようかと悩みました。フィリピン、ネパール、スリランカの子どもたちは成長すること、新しいことを経験したり、自分について気付きを得ること、自分の可能性について思いを馳せる機会が限られているのです。そうした機会を提供する活動にも力を入れていただきたいです。

御牧 今回の座談会で CFJ の活動の原点を振り返り、CCF から受け継いだ、一人ひとりの子どもを尊重し、与えられた命を全うできるように支援するというキリスト教の教えに基づいた、保育・福祉の専門職の教育、国内・国境を越えて子ども、家庭と地域への支援体制を構築することの意義を改めて感じました。当団体の更なる発展のために、今後ともご指導の程よろしくお願いいたします。このたびは、貴重なお話を伺う機会をいただき、ありがとうございました。



小林毅氏

支援の輪が紡ぐ未来 — 50周年を迎えて

チャイルド・ファンド・ジャパン フィリピン事務所 カントリーディレクター
滝田 裕之



チャイルド・ファンド・ジャパンは、皆さまのあたたかなご支援と応援に支えられ、設立 50 周年を迎えることができました。この節目を迎えられたのは、長年ともに歩んでくださった支援者の皆さま、そして活動を支えてくださった関係団体の皆さまのおかげです。心より深く感謝申し上げます。

フィリピンでの活動は、私たちの原点であり、多くの子どもたちの未来を切り開く重要な役割を果たしてきました。教育の機会を届ける学校の整備、災害時の緊急支援、保健衛生の向上、そして暴力撲滅の取り組み——これらすべては、地域コミュニティやパートナー団体との信頼にもとづき、進められてきました。

スポンサーシップを通じて、教育を受けた子どもたちが、目を輝かせながら夢を語る姿に、私たちは活動の意義を深く感じています。

50 周年は、新たな挑戦の始まりでもあります。気候変動や経済格差といった課題に取り組み、すべての子どもたちが安心して夢を追いかけられる社会を目指し、引き続き全力を尽くしてまいります。

これからも変わらぬご支援とご協力を賜りますようお願い申し上げます。ともに築く未来が、より多くの子どもたちの笑顔と希望に満ちたものとなることを願っています。

感謝とともに歩んだ50年 — そして次の一歩へ

チャイルド・ファンド・ジャパン ネパール事務所 カントリーディレクター
シェルパ・アンパサン



本年、チャイルド・ファンド・ジャパンは設立 50 周年を迎えます。この重要な節目にあたり、子どもたちや家族、地域社会の生活に前向きな変化をもたらす旅路の中で、支えてくださったすべての支援者、パートナー、関係者の皆さまに、心より感謝申し上げます。

2006 年にネパール事務所を設立して以来、チャイルド・ファンド・ジャパン ネパール事務所は、教育、健康、生活支援、そして子どもの保護を通じて、子どもたちの力を引き出すことに尽力してきました。皆さまの寛大なご支援と献身により、数え切れないほどの子どもたちが夢を持ち、成長し、より良い未来を築く機会を得ることができました。

私たちのネパールでの活動は、政府機関、現地の

NGO、地域密着型の団体との緊密な連携によって支えられています。こうしたパートナーシップにより、貧困や脆弱性の根本的な原因に対処する、持続可能なプログラムを実施することが可能になりました。

この 50 周年の節目を迎え、私たちは未来に向けて新たな決意を抱いています。すべての子どもたちが質の高い教育を受け、適切な医療を受け、安全な環境で成長できるよう、さらに活動を拡大していくことを目指します。また、パートナーシップをさらに強化し、子どもの権利を擁護し、より多くの子どもたちに貢献していきます。すべての子どもたちが可能性を最大限に発揮できる世界の実現に向けて、今後とともに歩んでいきましょう。

ともに働く仲間にご支援くださる皆さまへ

チャイルド・ファンド・スリランカ地域代表
アディティ・ゴーシュ



チャイルド・ファンド・ジャパンの50周年記念を前に、ご支援くださるすべての方、ともに働いてくださる仲間、そしてこの活動のために努力を続けるスタッフに、心からの感謝をお伝えしたいと思います。

長年にわたり、私たちは、チャイルド・ファンド・ジャパンおよび各関係団体との協力によって、スリランカの多くの子どもと家族の生活を変えるために努力を続けてきました。ともに、子どもの幸せのために、信頼と思いやりと協力の基礎を築いてきました。

これから先も、皆さまと協力して、改善の努力を続けていきます。私たちは、さらに計画を推し進め、支援の対象を広げ、持続可能で意味のある変化をこの地に作り出すこ

とを目指していきます。その達成のための能力を高める、構造的な変化を起こす努力を行っていきます。これらが軌道に乗れば、より多くの子どもと家族に手を差し伸べ、長期的かつ持続可能な影響を与えることができると、私たちは考えています。

皆さまのたゆまぬご支援のおかげで、子どもたちに力を与え、その可能性を育て、すべての子どもたちに明るい未来をつないでいけるのです。

私たちの活動への多大なご協力に感謝いたします。今後とも協力して成果をあげていくことができますよう、ここに祈りを捧げます。

チャイルド・ファンド・ジャパンとともに、人生が変えられてきた50年を祝う

北部ルソン イサベラ州 協力団体 プロジェクトマネージャー
エルマー P. ボンダッド



アジアの子どもたちと地域社会の生活改善のために、揺るがない献身を続け、50年という驚くべき道のりに達したチャイルド・ファンド・ジャパンにお祝いを申し上げます！

個人的にも、皆さまのミッションの一部を成していることが、私の人生にとって大きな喜びです。もちろん、毎日が完璧であるわけではありません。ときには、書類業務を次から次へとさばくうちに、まるでオリンピックで競技をしているかのように感じられることもあります。しかし私たちは、現場での働きに焦点を合わせ続けてきました。机にしばりつけられるのではなく、ソーシャルワーカーとして、地域社会に直接的な影響をもたらしてきました。他方、それらの間にも、フィリピン事務所（マニラの CFJ 現地事

務所）にいる皆さまの献身的なチームとともに、子どもたちの暮らしと人生が、良い方向に変えられていく喜びを分かち合い、笑い合うことで、私たちの心の炎を燃やし続けてきました。

50年にもおよぶ活動は、決して小さな功績ではありません。それは苗木が、嵐や時代の流れを耐え抜いて、堂々たる Sugi（杉の木）へと変わるのに十分な時間です。これからも、皆さまの情熱が確固たるもの、その主導が斬新なもの、その協力体制が忍耐強いものであり続けますように。そして次の50年に向けて、壁を打ち破り、意気を高め、愛と決意をもって、この世界を真の意味で変えられるのだ、ということを実証できますように！

チャイルド・ファンド・ジャパンと私

スポンサー

藤田 智子



今から30年ほど前のある日、母の知人から「こんながあるから読んでみて」と渡されたのが、チャイルド・ファンド・ジャパン（当時、国際精神里親運動部）の案内でした。そこにはフィリピンのチャイルドのことが紹介されていて、少し前に、ダイビングで出会ったフィリピンの皆さんのことが頭をよぎりました。決して豊かとはいえない生活の中で、異国の私に対して、心からのもてなしをしてくださった人々のことを思い出し、これで少しはお返しができるかも、と迷うことなくサポートを申し出ました。

その後、スリランカ、ネパールのチャイルドが加わり、今は3カ国3人の支援をさせていただいています。この30年余りで何人のチャイルドと出会ったかしら。チャイルド

の成長記録、さらに直筆のカードや手紙が手元に届くたびに胸が熱くなります。

ある女の子は、サポート終了時の手紙で、「勉強する機会に恵まれて、将来は自立してしっかり生きていきたい」と、熱い思いを伝えてくれました。

私の祖母は、小学校もまともに通えなかったと聞いています。その祖母が生前に書いた最後の手紙には、ただ嬉しいひらがなでこう記されていました。「ひとはこころでいきる」。チャイルド・ファンド・ジャパンは、私の魂をその言葉につなげてくれます。

50周年おめでとうございます。これからも心と心をつなぐ架け橋でいてください。

50周年を心よりお祝い申し上げます！

株式会社東横イン 代表執行役社長

黒田 麻衣子



東横 INN では、2003年より、国内全店舗の支配人が、それぞれ一人のチャイルドの里親になっており、この活動が企業文化の一部となっています。

クリスマスカードの交換等を通じて個人的なつながりを感じ、「卒業後の進路が決まった」「資格を取得できた」といった報告に喜びを分かち合い、そして次のチャイルドとのご縁を楽しみに待ちます。私自身も、明るい配色の不揃いの字のカードが、しっかりした文章で力強いメッセージを書いたものによって、そんな感動を味わいました。

フィリピンの貧しさの中で暮らす子どもたちが、教育を受ける機会を得て、将来に夢を持てる環境を提供し、自立を促すこと、そしてそれは、戦後日本の苦しい子どもた

ちを支えてくださった恩返しにもなること、—ここに強く感銘を受け、支援を続けてまいりました。

この活動に参加することが、会社全体が社会的責任や世界への貢献を考えるきっかけとなり、東横 INN は子どもたちの輝く未来のために貢献することを選んでいきます。

貴団体の皆さまが、50年にわたって積み重ねてこられた支援活動は、多くの子どもたちと家族に希望を届けてきました。その活動に微力ながら参加できることを、私たち東横 INN 一同、誇りに思っております。これからも、子どもたちが大切にされている実感を持って、未来に希望を持ち、心豊かに生きられる世界を目指し、皆さまと歩んでまいります。

優しく紡がれて

日本キリスト教団日立教会 るつ記記念基金(RFMF)委員会委員長
和田 直



1982年、大学の夏休みで帰省中だった藤崎るつ記さんが、教会の女性グループにアジア旅行の体験と貧しい人々の状況を報告し、国際精神里親運動部(CCWA)のフィリピンでの活動を支えてほしいと、熱心にアピールしました。その結果、4つの支援グループが誕生し、CCWAから提供された里子の写真を見たり、当時ははるか遠くに思えたフィリピンの状況を学び合ったりと、それぞれの支援活動が始まりました。

そして翌1983年、るつ記さんがフィリピン・ポトランの海でおぼれた二人の友人を救おうとして命を失った年の秋、CCWAのご指導の下、教会に「るつ記記念基金」が誕生。経済的に困難なために、大学教育を断念せざるを

得ない青年たちへの奨学金支援が始まりました。その後、年間1人から始まった奨学生の増員、さらにフィリピン訪問交流や日本研修プログラムの実施等々、2023年度にこの制度が終了するまで、39年間にわたり、地方の小さな教会の目を世界へと開き、自立して人々と共に生きるようにと導いてくださいました。2025年現在、支援奨学生累計は150名になりました。

1982年から始まる日立教会の物語はCCWA、チャイルド・ファンド・ジャパンの皆さまに優しく紡がれて今も続いています。

心からの感謝と敬意を込めて…、「50周年おめでとうございます!」

チャイルド・ファンド・ジャパン50周年に寄せて

青山学院初等部部长
小澤 淳一



CCWAとの出会いは、初等部の生徒が、教会学校で支援のお話を聞いたことがきっかけでした。最初は一つのクラスによる支援でしたが、やがて学校全体で支援を行うようになりました。そして、自分たちの献金がどのように役立っているのかを知りたいと考え、フィリピンの支援地域を訪れる計画を立てました。初回の訪問は教員のみで、1995年3月に実施しました。これは「青山学院フィリピン訪問プログラム」として継続しています。

今までに訪問した地域は、ミンダナオ島のカガヤンデオロ、セブ島のバリリ、ネグロス島のバコロド、パナイ島のイロイロ、ルソン島のアンティポロなど、多岐にわたります。都市部の貧困地域と農漁村の貧困地域では、それぞれ異

なる課題がありますが、そこで暮らす人々の心は変わりません。日本の子どもたちと、フィリピンで支援を受けている子どもたちが一緒に遊び始めると、言葉が通じなくても同じことを楽しいと感じます。

CCWAの時代から、地域支援は、「子どものバリューフォーメーション」に始まり、その背後にいる親の意識改革へと広がっていきました。そして、新しい価値観を持った親(大人)たちが地域に影響を与え、支援地域の自立を促しています。私たち現地を訪問する一人ひとりも、たくさんの「バリューフォーメーション」のチャンスをいただいています。聖書の「平和を造る人々は、幸いである」(マタイ5:9)を生きる者でありたいと思います。

50周年おめでとうございます。私が里親会員になったのは、40年近く前になります。CCWA（当時）の新聞一面広告で、小学生がクラス全員で里親会員をしている記事を読み、感動して始めました。つらいことがあっても、里子のことを思い出すと、かえって里子に励まされてきたことが多かったです。何人もの里子が巣立っていきましたが、一人一人感慨深いものがあります。こんなにたくさん子どもを持てたこと、深謝しています。

中里さま

里子との手紙交換を行うことで、こんな幸せが。
「外国」が「里子が住んでいる国」に。
送金することで、自分の働き甲斐や安全運転に繋がった。
流産した子への償いの意味で、二人分を目標にしたら気持ちに張りがある。
久しぶりに英語の勉強になったので、気持ちが若返った。
食事の度に里子のことを祈るようになり、自分自身の幸せに。
節約が里子への送金につながるの、節約が楽しめた。
里子の頑張り、自分の幸せに。有難う。

S.M.さま

50周年おめでとうございます。
私はスリランカのチャイルド・スポンサーとボイス・サポーターです。
支援地域の皆さんの明るさや強さに学ぶ事が多く元気をもらっています。
チャイルドからの手紙が一番嬉しいです。繋がりを実感できてワクワクします。
これからもチャイルド・ファンド・ジャパンを応援していますし、募金という支援を通して人道や国際支援について学ばせていただきたいと思います。

中川さま

スタッフの皆さま、いつもありがとうございます。
育休から職場復帰し、娘の成長を見て我が子だけでなく世界のほかの子どもたちも幸せに過ごしてほしいという気持ちが強くなっていったときに、1998年3月の同窓会報の大谷リツ子さんの記事に出会い、里親のお仲間に入れていただきました。
両親の介護で退職し、今は年金生活ですが、これからもサポートを続けていけたらと願っています。今後ともよろしくお願いたします。

M.M.さま

50周年おめでとうございます。チャイルド・ファンド・ジャパンで一番思い出深いのは、37年前ワークキャンプに参加させて頂いた事です。現地の青年達と共にフィリピンに保育園を建てるというものでした。皆で汗だくになってペンキ塗りをした事、国の厳しさと人の優しさを感じた現地の方々との交流、参加した仲間とのたわいもない時間…時間は経ちましたが、思い出とその時の仲間との交流は今も続いています。

M.K.さま



寄せ書き

文通できるサポートだと知り、即決したのは約40年前です。訪問旅行も参加できて2人に会いましたが、卒業後の皆に会いたい気持ちは大きくなるばかり。知る楽しさには後になって気づくとしても、学校で勉強できることを思いっきり楽しんで欲しくて、応援を続けています。受け取った手紙は宝ものです。疲れた〜と帰って、ポストに届いていけば、元気になります。50周年おめでとうございます。

K.H.さま

50周年おめでとうございます。地域でのボランティアで、お手紙の翻訳をはじめ10年余り、世界の貧困地域の状況を手紙や報告で知ることができありがたく思います。最近では現地の子どもたちがタブレットを使える地域もあり、日本はもちろん世界への関心が高まることでしょう。また、昨年からは日本で暮らす外国人の学習サポートのサポーターも微力ながらはじめました。これからも国内外でのチャイルド・ファンド・ジャパンの活動を応援いたします。

K.K.さま

50周年おめでとうございます！

私たち夫婦は、1990年前後に行われたフィリピンへのYOUTH CAMPが縁で結婚しました。CAMPでは、現地のホストファミリーやスタッフの皆さんから、誰かにつながることで、その人のために行動することの素晴らしさや難しさを教わりました。

その後、スポンサーツアーにも参加し、チャイルドや家族にも会い、スポンサー同士のつながりもできました。チャイルド・ファンド・ジャパンは、人と人が共に生きる喜びを教えてくれた大切な場所です。

米田さま

チャイルド・ファンド・ジャパンとの出会いは、1983年に勤めたルーテル学院大学に、教員としてフィリピンの子どもの学びと育ちを支援する大谷嘉朗先生、リツ子先生がおられました。支援者になって以降、子どもたちから届く写真と成長記録から、一人ひとりの子どもが学び、それぞれが目指す将来を描いていく道を子どもと一緒に歩いていく感動を与えられていました。50周年を迎え、これからも子どもたちの可能性を支えて下さることを期待します。

市川さま

支援者

from
Supporters

チャイルドからのお手紙や記録を取り出して整理しかけたら懐かしくてとても時間がかかってしまいました。41年！近く、7人のチャイルドにご縁がありました。少しでも、彼らの良い成長のお役にたてたなら、私の方こそありがたく幸いです。子どもたちの事情に変化もありました。それぞれに愛らしい、みんな違ってみんないい、子どもたちでした。久々に写真などを見て、最初のも成長後もかわいくて、ふっと笑ってしまいます。すっかり大人になっただろうと彼らそれぞれの今に思いをはせています。幸せを心から祈っています。

N.I.さま

50周年おめでとうございます。

私たち保護者会では、1977年からスポンサーシップ・プログラムに参加し、フィリピンの子どもの成長を見守ってきました。

子どもたちから届くクリスマスカードや成長の記録を楽しみにしています。これからもプログラムを通じて、社会課題に向き合いながら、子どもたちとの豊かな交流を続けていきたいと思っております。

福山暁の星小学校
保護者会の皆さま



Early days 前史

チャイルド・ファンド・ジャパン (ChildFund Japan) のルーツは、端的に言えば、キリストの伝える愛を世界の困窮する子どもたちへの支援の中で具現化しようと努力してきたアメリカ、カナダの宣教師たち、そして第二次大戦後の日本のキリスト者たちの信仰に裏打ちされた活動にあるといえるだろう。

1938年、アメリカ・バージニア州で生まれた基督教児童基金（発足当初は China Children's Fund と呼ばれた。のちに Christian Children's Fund - CCF と改名される）は、当時日本軍の中国侵攻によって生じた中国の戦災孤児たちを救うために発足した。この活動を現地で担っていたカナダ人宣教師ミルズ博士（当時 29 歳）は、1942年に 142 人の戦災孤児たちとともに戦火を逃れて 800 マイル（約 1300 キロ）の逃避行を行い、自ら天秤棒の両端のザルに小さな子どもを 2 人ずつ乗せて徒歩で避難を敢行するというエネルギーな宣教師であった。

このミルズ博士は、戦後間もない 1948 年に日本の戦災孤児たちの惨状に接し、同じ情熱と愛をもって日本各地の児童養護施設を巡って CCF による支援を届けるために尽力された。戦争直後の道路事情も悪い中で、悪路で車が動けなくなっても泥道を歩き、山間部の児童養護施設を訪れることも厭わなかったという。当時の日本の施設の様子を、CCF 資金の受け入れ母体となった基督教児童福祉会 (Christian Child Welfare Association-CCWA) の事務局を担っていた儀賀精二氏は次のように回想している。

「あばら家にも等しい建物の中に、シラミとノミと南京虫に悩まされながら、暗い電灯の下で、薄汚い異様な匂いのする寝具に包まれて、犬小屋のような部屋に八人から十人くらいがひと固まりになって雑魚寝していた児童たち。与えられた食事と言えば、軍隊（旧日本軍）の食べ残した乾パンに、水の中に金魚のえさのような麩（ふ）が一つ二つ浮かんでいる汁に飢えをしをいでいた。」

CCF の日本への支援は 1974 年末まで 26 年間続き、全国の 100 に近い児童養護施設でおよそ 9 万人に上る子どもたちが支援され、多くのソーシャルワーカーに研修が提供された。小舎制によるモデル施設も 3 つ始められて、日本の社会福祉制度に与えた影響も大きい。



支援を受けていた日本の子どもたち

CCF による支援終結にあたり、支援を受けていた養護施設の施設長や CCWA 事務局では、大谷嘉朗氏が中心となり「国際精神里親運動部」を立ち上げ、戦争中に日本がアジアの人々に強いた犠牲に対し、アメリカから受けた愛のバトンタッチ（順送りの恩返し）として、フィリピンの（そして規模は小さいながら韓国やタイの）子どもたちへの支援活動を始めた。これは日本のキリスト者としてアメリカやカナダの人々から受け取った愛を主体的に受け継ぎ、日本の始めた戦争への贖罪を果たすという覚悟と決断をもって始められた活動だったといえるだろう。

1975 年から日本の人々により始められたフィリピンへの支援に対しては「うまくいくはずはない、誰も支えてくれない、（当時戒厳令下にあったフィリピンの）独裁政権の支援にしかならない」などの批判も国内で受けたが、当時、国際精神里親運動部を担った人々は「私たちの向かう道ははっきりしている」という信念のもと、CCF のスポンサーシップの形を「精神里親運動」（物理的支援だけでなく精神的にも子どもを支えていく）という言葉に置き換えて紹介し、「国際協力」という言葉もなかった時代に日本人にも理解しやすい形で、国の壁を越えた和解と平和をもとめる運動を展開していった。その動きは（インドシナ難民の問題を経て）1980 年代に日本の市民の間で湧き上がる国際協力活動の動きの先駆けとなっていった。今や 21 世紀を迎えて「国際化」や「国際協力」が当たり前になり、語られる時代となり、国連を中心に「持続可能な開発目標 (SDGs)」が求められる中で、CCF からのつながりを持つ活動は ChildFund Alliance として新たな展開を遂げ、日本の CCWA もその一員の ChildFund Japan として新たな一歩を始めている。

1975～2005年の詳しい年表は、団体HP掲載の「CCWA 創立30周年記念誌」参照

	活動	一般事項
1946年	ララ物資援助開始	フィリピン共和国成立
1948年	CCFの日本の戦災孤児支援開始（東京育成園、愛隣団など）	児童福祉法施行
1952年	基督教児童福祉会（CCWA）として社会福祉法人設立 CCFとCCWAの組織的な支援協力関係開始	サンフランシスコ講和条約締結。日本が国際社会へ復帰。
1956年	バット博士記念ホームを開所（「愛隣団・育児部」の児童と職員が移転）	
1960年	CCFの支援によるソーシャルワーカーへの現任訓練活動（バット・センター）が玉川保母専門学院として発足	
1965年	玉川保母専門学院が発展し、和泉短期大学として文部省の認可を受ける	
1975年	基督教児童福祉会・国際精神里親運動部開設 フィリピンでのスポンサーシップ事業始まる	ベトナム戦争終結
1976年	フィリピン以外のアジアの国への支援として、韓国児童福祉財団を通じた児童養護施設への支援開始	
1977年	タイのプラティープ学校へ支援金を送金	
1978年	フィリピンで第1回ワークキャンプ実施（1999年まで18回実施）	
1981年	芳村真理さん（里親）の紹介で会員急増	
1983年	茨城県日立教会に設立された「藤崎るつ記記念基金」によるフィリピンでの奨学金運営を委託される（2023年まで）	
1984年	IBMコンピュータによる会員管理開始	
1986年		フィリピン：ピープルパワー革命。コラソン・アキノ大統領就任
1987年	マニラにフィールド事務所（MFO）開設	
1989年	岸千年理事長ご逝去、翌年、深町正信理事長就任 大谷嘉朗部長退任、小林毅部長就任	ベルリンの壁崩壊。東西冷戦終結へ 「児童の権利に関する条約」を国連総会が採択
1990年	CCWA15周年記念集会（支援チャイルド3名を招へい） 北部ルソン地震被災者への支援実施 フィリピン、カガヤンデオロでYouth Campを実施（1991年まで3回）	ネパール：立憲君主制へ移行 フィリピン：北部ルソン大地震
1991年	東京弁護士会人権賞受賞 ピナトゥボ火山噴火被災者への支援開始	フィリピン：ピナトゥボ火山20世紀最大の火山噴火
1992年	国際ボランティア貯金配分金により、CCFエチオピア事務所を通してストリートチルドレン支援事業実施（1998年まで）	フィリピンからアメリカの基地が全面的に撤去される
1994年	1976年以来続いていた韓国児童福祉財団を通じた支援が、ソーシャルワーカー3名の日本招へい研修をもって終了	「児童の権利に関する条約」を日本が批准
1995年	CCWA20周年。新事務所が3月に竣工 阪神淡路大震災被災者へ支援金を送金 フィリピン、バギオ市の1番目の支援センターが自立 United Mission to Nepalを通してネパールでの支援活動開始	阪神淡路大震災 地下鉄サリン事件 ローマ法王、ヨハネ・パウロ二世がフィリピン訪問
2000年	支援チャイルドのデータベースシステム（IMOS）導入 ミンダナオ島中部で武力紛争被災者への支援実施 CCWAホームページ開設 25周年記念映画の作成と全国上映会実施	フィリピン、ミンダナオ島でモスラムとの紛争拡大 「ミレニアム開発目標（MDGs）」採択
2001年	フィリピンで、チャイルド2名を招へいして「子ども会議」を開始 全国社会福祉協議会会長特別表彰受賞	アメリカ：9.11同時多発テロ発生
2003年	エチオピア干ばつ被災者支援実施	エチオピア干ばつ深刻化
2004年	フィリピンで50番目の支援センター開設	スマトラ沖地震津波被害
2005年	国際精神里親運動部は30周年をもって基督教児童福祉会から独立し、特定非営利活動法人「チャイルド・ファンド・ジャパン」として新たな一歩を始める	

	国内のできごと	海外のできごと	一般事項
2005年 3月	特定非営利活動法人チャイルド・ファンド・ジャパンとして法人登記(3/7) 第1回理事会でチャイルド・ファンド・アライアンスへの加盟を決議	フィリピン、ネパールで、CCWA 時代からの事業活動を継続実施	
11月	元巨人軍篠塚和典選手主催によるスマイリング・パートナーズ チャリティゴルフ大会開始(2005年～2014年)	チャイルド・ファンド・アライアンス理事会に参加	
2006年 5月	学校法人クラーク学園(和泉短期大学、和泉福祉専門学校を運営)の50周年に際し、CCF代表ロジャー・グレゴリー判事と韓国福祉財団会長のスック・サム・キム氏が来日	マニラにて、「夢」をテーマに「フィリピンと日本の子どもの絵画展」開催	ジャワ島中部地震発生(マグニチュード6.3)
6月		ネパール政府と一般協定書と事業合意書を締結 ネパール事務所開所	
7月	日本とフィリピンの間の相互理解と友好親善の促進に貢献したとして、外務大臣賞を受賞。 マニラにて麻生外務大臣より表彰される		
11月	ピース・チャリティ・コンサート日比友好年記念開催 スリランカスポンサー募集キャンペーン	スリランカでのスポンサーシップ・プログラム開始	
2007年 2月	在日フィリピン大使館と国際交流基金の後援で、「愛」をテーマに「フィリピンと日本の子どもの絵画展」実施(東京)		
3月	CCWA 時代からの32年間の活動をもとに、CFJとしての活動指針となるビジョンとミッションを第7回総会で承認		
2008年	新しい団体説明DVD、パンフレットを作成		
2月		「フィリピン訪問の旅」を実施(西ネグロス州、イロイロ州、ギマラス州訪問)	
5月			ネパール王制廃止
9月		故細野雅央氏のご寄付による教育支援プロジェクト(2008.9～2011.8、カンボジアとネパールの学校建設及びフィリピンの教育センター建設)	
11月	東京事務所のオープンハウス開催		
2009年 4月	国税庁長官より「認定NPO法人」に認定される		
11月			「子どもの権利条約」20周年
2010年 2月	ネパール スポンサーシップ・プログラム開始記念参加協力キャンペーンイベント		
4月	チャイルド・ファンド・ジャパン設立5周年記念映画作成、記念報告会実施	ネパール スポンサーシップ・プログラム開始(ラメチャップ郡)	
6月			ベニグノ・アキノ3世フィリピン大統領に就任
7月	Small Voices Big Dreams(子どもたちの小さな声大きな夢)アンケート実施		
2011年 1月	「杉並区民の手でネパールに学校を！」キャンペーン開始(2011.1～現在)		

	国内のできごと	海外のできごと	一般事項
3月	東日本大震災緊急・復興支援プロジェクト（2011.3.～2013.3 アライアンスからの資金助成）		東日本大震災（マグニチュード9.0）
2013年 3月		アライアンスが、ポスト2015開発アジェンダ（現SDGs）に子どもへの暴力撤廃を盛り込むよう、国連へ提言	
11月		フィリピン台風「ハイエン」緊急・復興支援プロジェクト開始（アライアンス協働及びCFJ独自事業）	大型台風「ハイエン」フィリピンレイテ島を直撃
2014年 3月			フィリピン：ミンダナオ島における包括的和平合意締結 西アフリカを中心にエボラ出血熱が流行
6月	法人理事長に高田和彦就任		
8月	フィリピンのセンター長エドゥアルド・ソラ氏来日、報告会		
2015年 1月			ローマ法王フランシスコ、フィリピンを訪問
4月	東京都より「認定NPO法人」に認定される 事務局長に和山正秀就任	ネパール大地震緊急・復興支援開始（2015.4～2017.5、シンドゥバルチョーク郡、ラメチャップ郡、CFJが実施主体となりアライアンスとの共同実施）	ネパールでマグニチュード7.8の地震発生
9月	マンスリー・サポーター開始		国連総会にて2030年までの持続可能な開発目標（SDGs）採択
12月		3月に仙台で行われた国連防災世界会議において採択された「仙台防災枠組」（英語版）が、アライアンスにより発行	
2016年 4月	熊本地震緊急支援開始	ネパール、シンドゥバルチョーク郡でスポンサーシップ・プログラム開始	熊本地震発生（マグニチュード6.5）
5月		フィリピン 東サマル州の支援センター（42）の自立	児童福祉法第1条に「児童の権利に関する条約の精神にのっとり」が明記される
6月	ネパール、フィリピン活動報告会実施		フィリピン Kto12 制度で初の11年生誕生 ドゥテルテ大統領就任
7月	熊本地震緊急支援の一環として「被災地の親と子どものこころのケア」冊子を発行 熊本いのちの電話に資金援助	ネパール地震への支援に続いて、チャイルド・ファンド Korea によるネパール事業への資金助成始まる	
12月		バス・イット・バック～タグラグビーで子どもの成長を支えるプロジェクト開始（2016.12～2017.9、フィリピン）	
2017年 2月		9年ぶりとなる「フィリピン訪問の旅」を実施（西ネグロス州、ギマラス州、カビテ州、イロイロ州訪問）	
4月	事務局長に武田勝彦就任		
5月		フィリピン 南カマリネス州の支援センター（40）が自立	

	国内のできごと	海外のできごと	一般事項
9月	GPeVAC（子どもに対する暴力撤廃のためのグローバルパートナーシップ）のアドボカシー開始	ネパール大地震の約2年半の緊急・復興支援終了	
2018年 2月	日本政府「子どもに対する暴力撲滅グローバル・パートナーシップ」（GPeVAC）に参加		
3月		ネパール ラメチャップ郡の支援地域が自立	
5月	法人理事長に長山信夫就任	フィリピン エバビスカヤ州の支援センター（49）およびコタバト州の支援センター（50）が自立	
9月	「チャリボン」と協働し、古本での寄付受付を開始		
10月		「ネパール訪問の旅」実施	
11月	GPeVACにかかわる日本政府のNational Action Plan 作りに、GPeVAC日本フォーラム10団体の一つとして参画	ネパールで、外務省 NGO 連携無償資金協力による校舎建設プロジェクト開始	
2019年 4月	京都で支援者交流会開催		
9月		「チャイルド・ファンド・パス・イット・バック」アライアンスとワールドラグビー、アジアラグビーとの協働	ラグビーワールドカップ2019日本大会開幕
10月	令和元年台風19号被災者支援。長野県千曲川近辺を中心にシャンティ国際ボランティア会と協働		
11月	熊本で支援者交流会開催		
2020年 1月	「子どもと若者のセーフガーディング最低基準のためのガイド」発行（JANIC加盟団体との共同製作）		新型コロナウイルス感染拡大
5月	オンライン・動画報告会開催。新型コロナウイルスの影響で対面できなくなり、新しい報告の形が誕生	チャイルド・ファンド・アライアンス、56億円相当の新型コロナウイルス対応策を策定	
7月		フィリピン・イフガオ州の支援センター（28）が自立	
11月		チャイルド・ファンド・アライアンスに12番目のメンバー「WeWorld」が加盟	
2021年 5月	青山学院大学サービス・ラーニングに講師として参加。コロナ禍の支援活動やOSEC（子どもへのオンライン性搾取）について取り上げた		
6月	チャイルド・ファンドがラグビーワールドカップ2021のチャリティーパートナーに任命		
12月		スリランカ モナラーガラ県にてスポンサーシップ・プログラムを開始	
2022年 2月	OSECをなくすためのオンライン署名開始。ウェビナーも開催	チャイルド・ファンド・アライアンスが連携し、ウクライナ緊急支援を開始	ロシア軍がウクライナへの侵攻を開始
4月		ネパールのダーディン郡でスポンサーシップ・プログラムを開始	スリランカ、外貨不足・債務不履行状態から深刻な経済危機に
6月	法人理事長に高橋潤就任		フィリピンでフェルディナンド・マルコス Jr. が大統領に就任
7月		スリランカで経済危機への支援開始	
9月	OSECシンポジウム開催		

	国内のできごと	海外のできごと	一般事項
10月	ネパールのスタッフが来日し、久々に対面でトークイベントを開催		
11月		フィリピンで対面授業が全面的に再開。新型コロナウイルスの感染拡大以来2年以上ぶり	
2023年 2月		アライアンスを通して、シリアでの緊急支援を開始	トルコ・シリア大地震（マグニチュード7.8）
4月	外国にルーツのある子どもへの補習教室「学びのフレンドリースペース」を開始	フィリピン事務所がチャイルド・ファンド・ジャパン（国際NGO）のBranchとして活動開始	こども基本法施行 こども家庭庁設置
5月		フィリピン イロイロ州の支援センター（1041）が自立	
10月	子どもの性搾取問題の解決に向けたシンポジウム開催 子ども・ユースとともにグルーミングの啓発動画を開始 対面での活動報告会を開催 コロナ禍以来	アライアンスを通じて、パレスチナ・ガザ緊急支援開始	10月7日パレスチナ・ガザで武力衝突が始まる
2024年 2月		アライアンス主催で、「Safer Internet Day」の国際シンポジウムをマニラで開催	
4月	シンポジウム「生成AIの子どもへの権利への脅威」を開催	スリランカの子ども517名に日本の中古自転車を寄贈	
5月		フィリピン 西ネグロス州センター（1024）の自立	
7月		マニラ首都圏にて、スポンサーシップ・プログラムおよびチャイルド・ボイス・プログラムによる支援開始	
11月	フィリピンオンラインツアー開催	アライアンス、「女性と子どもの権利に関するワールド・インデックス」を公表	
12月	「杉並区民の手でネパールの子どもたちに教育を！」キャンペーン開始。キャンペーン名、内容を変更		
2025年 3月		フィリピンで外務省 NGO 連携無償資金協力による保健医療施設建設プロジェクト開始	

Photo Gallery



学用品支給や教員研修などの教育支援は柱の一つ。
たくさんの子どもが学校を無事に
卒業していきました！



国際協力の始まりは 1975 年
フィリピンへの支援からでした



スポンサーさまのお手紙の交換は子どもの
心の支え！はじめはうまく書けない子どもも、
だんだんと上手に！



歌やダンス、演劇、アートで
子どもの権利をアピール！



フィリピン各地の子どもが集まって
いっしょに活動する「子ども会議」は
2001年から開催！



現地でボランティア活動などをする「ワークキャンプ」。
1998年まで8回開催！



現在の事務所は 1995 年に完成！
元チャイルドや現地スタッフが来ることも！



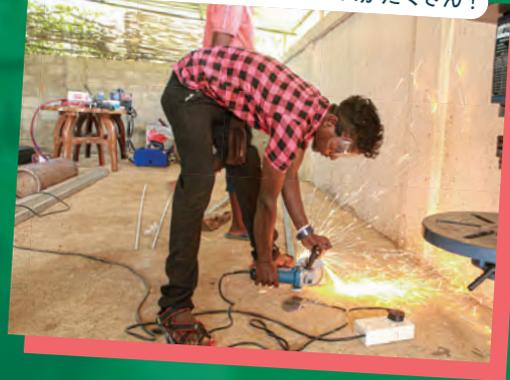
ボランティア、インターンの方々にも
支えられてきました！



1995年にはネパール、
2006年にはスリランカで支援開始！



スリランカでは職業訓練支援も重視。
スキルを身につけようがんばるユースがたくさん！



2015年、ネパール大地震が発生。子どもの
居場所づくりや教室、校舎再建に取り組みました！



スポンサーさまへの季節のカード作り、
がんばりました！



2011年東日本大震災で
初めての国内支援活動。



コロナ禍では活動自体が困難に。
子どもたちにはマスクの支援も。



支援者さまの現地訪問は、
子どもにとっても励みに！



ラグビーワールドカップ2019日本大会で
チャイルド・ファンドがチャリティパートナーに！



子どもを主役に、未来を開く！

チャイルド・ファンド・ジャパンは、1975年、海外にいる子どもたちへの支援に舵を切り、以来、多くの子どもたちに、開かれた未来を届けてきました。それができたのも、現地の人々と日本の支援者の長年にわたる協力関係があったからです。また、両者の間を結んできた、私たち組織の役員と国内外の職員による働きのお陰でもあります。これまで、この組織の使命の達成に貢献してくださった多くの皆さまに、心よりお礼をお伝えいたします。

ここで、これからの国際協力をめぐる状況について見てみましょう。確かなのは、社会問題の変化にともない、子どもの権利の課題に、もっと迅速に効果的に対応することが求められるようになったことです。近年、社会は年単位で急激な変化をしており、今までの支援の仕方では、子どもの権利を十全に護ることはできなくなっています。

たとえば、①貧困の量から質への変化、②オンラインでの子どもの権利侵害、③日本の内なる国際化の進展、④気候変動による自然災害の頻度と被災規模の増加、⑤戦争・紛争の恒常化といった重大な問題が顕在化しています。

そうした課題への対処に向けて、忘れてはならないことがあります。いつでも「子どもが主役」という視点です。従来の伝統的な支援では、子どもを支援の対象者として見てきました。海外の経済的に豊かな大人が、現地の経済的に貧しい子どもに支援を届けるという構図です。しかし、これからは、子どもを主役として支援を捉えていく必要があります。

子どもをまん中に置く「チャイルド・ファースト」の考え方では、大人が子どもを活動の中心に置くのではなく、

子ども自らが活動の中心に立ちます。大人が子どもを助ける時代から、子どもが子どもと社会を助ける時代へ。チャイルド・ファンド・ジャパンは、「生かし生かされる国際協力」という意識を大切にしています。スポンサーとつながったチャイルドの中には、大人になってから、社会福祉の仕事に就いた者や、フィリピン事務所の職員となった者もいます。スポンサーシップ・プログラムを支えていた学校の生徒の中には、国際協力に関心を持ち、関連分野で活躍する人もいます。支えられた子どもが支える大人に、支えた子どもが支える大人に、それぞれ生まれ変わる事例が、あまたあります。子どもたちのうちに秘められたチカラを、うまく引き出すことがとても重要なのです。

そして、こうしたこれまでの活動を受け、次の50年に向けた動きが始まっています。その例を2つご紹介します。

1つ目は、アドボカシーです。アドボカシーは、政策提言と言われるものですが、社会の問題をみんなに知らせ、その理解と支持を得て、法律や制度を良くしていく活動です。国際協力と言うと、現場で支援活動をすると思われがちです。開発途上国のある特定の地域の貧しい状況を改善すること。確かにそれは、とても大事なことです。しかし、隣の村や街は改善されていないといったこともよくあります。その国全体を良くするには一つのプロジェクトや団体の活動では力不足です。その国の政府を動かさなければ、全国規模の改善にはつながりません。その国の法律を改正したり、新しい法律をつくったりすることで、他の地域の人々の状況は変わっていきます。

チャイルド・ファンド・ジャパン事務局長
武田 勝彦



アドボカシーで欠かすことができないものが3つあります。エビデンス（客観的な情報や証拠）、人脈、当事者の声です。

アドボカシーでは、多くの人に事実を伝えて、説得していかなければなりません。その説得材料として、客観的な事実のデータは、とても重要なものになります。そして、法制度をつくる政府機関の人たちに、その社会課題を知ってもらうには、伝え手がいます。（ワイロなどの悪質なものでなく）善良なネットワーキングこそがこれを可能にします。

そして最後に、最も大事なものが当事者の声です。民主的な国家において法制度を変えるには、有権者である国民の支持が不可欠です。これを得るために最も効果的なのが、子ども本人、すなわち当事者の声です。自分たちの権利を侵害されている子ども自身が、問題点を訴えかけることで、人々は立ち上がります。子どもたちの意見を反映させたアドボカシーこそが、これからの法制度の改善には不可欠です。

チャイルド・ファンド・ジャパンでは、フィリピンやネパールにおいて、子どもが地域住民や政府機関に、課題解決を働きかけています。日本でも、学生が主体となって、政府に提言を行っています。現場での支援活動とアドボカシーは、セットなのです。

2つ目に、日本での、外国にルーツのある子どもたちの問題があります。日本では少子高齢化の影響で労働力が減ってきています。近年の日本は、外国からの人々によって支えられる国となっています。これまで日本から支援を届けていた国々から、人々が日本を助けに来てくれている

状況は、50年前には想像できなかったことです。現在、多くの移民が日本に来ており、その家族、特に子どもたちも、日本で生活して学校に通っています。

しかし、日本は世界的に見て、とても特殊な教育制度・学校文化の国です。親の都合で母国から連れて来られた子どもたちは、日本語という言語の壁にぶち当たり、さらに異質な学校で学ばなければなりません。長期的には、アドボカシーによって日本の教育制度を変えていく必要がありますが、短期的には今、目の前で困っている子どもたちを救っていかねばなりません。

チャイルド・ファンド・ジャパンは、2023年から外国にルーツのある子どもたちへの補習教室「学びのフレンドリースペース（通称フレスペース）」を開始しました。さらに、その保護者へのサポートと受け入れ地域（杉並区）の環境整備を始めています。これまで海外で行ってきた地域開発支援を、逆輸入して日本で実践しています。日本の、内なる国際化による子どもの課題も、すべての子どもに開かれた未来を約束するチャイルド・ファンド・ジャパンが取り組むべきものだと考えます。

チャイルド・ファンド・ジャパンは、主役である子どもの夢を叶える奉仕役になることを、大きなミッションだと考えています。ビジョンとミッションを達成するべく、時代に即したニーズに応える存在、それがチャイルド・ファンド・ジャパンに与えられた使命だと考えています。

常に教訓を活かして、改善を怠らずに挑戦を続ける。子どもに伴走するチャイルド・ファンド・ジャパンに、これからもご協力をお願い申し上げます！

プロジェクト一覧

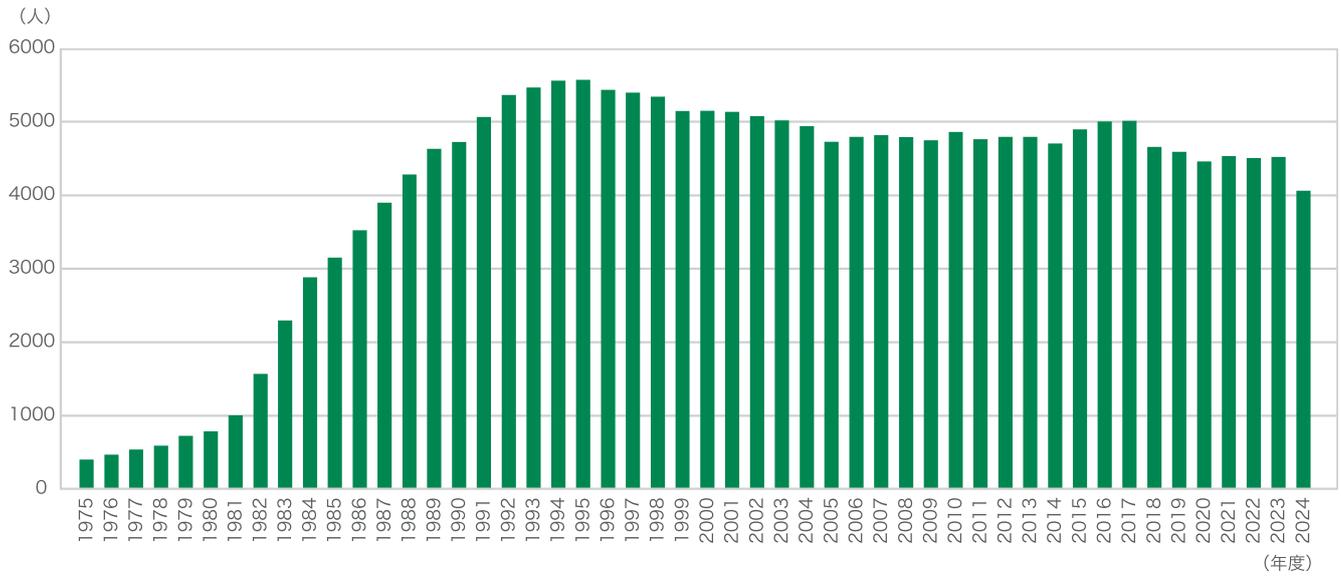
※2005年以前のプロジェクトは30周年記念誌参照

支援年	地域	プロジェクト名・内容	助成等
1996.7～2011.7	ネパール オカルドゥンガ郡と近隣5郡	地域病院プロジェクト	
2000.7～2008.7	ネパール ダーティン郡、マクワンプール郡、タナフン郡、オカルドゥンガ郡	栄養改善事業	
2003.6～2012.9	フィリピン パラワン州	パラワン少数民族生活改善プロジェクト	
2006.5～2007.10	インドネシア アチェ州	津波被災者の復興支援事業	
2006.5～2007.12	スリランカ アンパラ県	津波被災者の復興支援事業	
2006.6～2007.6	インドネシア ジャワ島、クラテン県、バントウル県、スコホルジョ県、マゲラン県	ジャワ島中部地震の復興支援事業	
2006.10～2009.9	ネパール ダーティン郡、カスキ郡、バルバット郡、ナワルバラシ郡、カピルバサツ郡、マホタリ郡	女性と子どもの栄養改善計画	JICA 草の根技術協力事業（パートナー型）
2008.5～2008.9	フィリピン バンガシナン州、南スリガオ州、イロイロ州、東サマル州	台風被災者支援事業	
2008.9～2011.8	カンボジア スバイリエン州、フィリピン、パラワン州、ネパール、マホタリ郡、ダヌシャ郡	故細野雅央様からのご寄附による教育支援プロジェクト	
2009.4～2010.9	ネパール マホタリ郡	ネパール アマルプール小学校建設プロジェクト	
2009.5～2010.2	スリランカ北部	国内避難民緊急支援プロクト	
2009.5～2009.10	フィリピン バンガシナン州、マニラ市	台風被災者支援プロジェクト	
2009.7～2010.3	ネパール ラメチャップ郡	スポンサーシップ・プログラム・スタートアップ・プロジェクト	
2010.1～2011.2	ネパール バルバット郡	「女性と子どもの栄養改善計画」のフォローアップ・プロジェクト	
2010.4～2016.3	ネパール ラメチャップ郡	子どもにやさしい学校環境整備プロジェクト	
2010.6～2011.3	フィリピン	子どもの最善の利益を守る IMOS の整備プロジェクト	
2010.6～2012.5	フィリピン イサベラ州、イフガオ州、オーロラ州、ヌエバ・ビスカヤ州、南カマリネス州、ケソン州、カピテ州、南カマリネス州、西ネグロス州、東サマル州、セブ州	子どもが読書に親しむプロジェクト	
2011.3～2013.3	日本 福島、宮城、岩手	東日本大震災 緊急復興支援プロジェクト	
2011.9～2014.5	フィリピン カピテ州、イロイロ州	協同組合強化支援プロジェクト	
2011.12～2012.11	フィリピン 東ミサミス州、北ラナオ州	台風緊急支援プロジェクト	
2012.11～2013.3	ネパール シンドゥパルチョーク郡	新支援地域スタートアップ・プロジェクト	
2013.1～2013.11	フィリピン コンポステラ・バレー州	台風被災地復興支援プロジェクト	
2013.4～現在	ネパール シンドゥパルチョーク郡、ゴルカ郡、ダーティン郡	子どもを守るコミュニティ形成プロジェクト	
2013.8～現在	フィリピン	みんなで守る子どもの権利プロジェクト	
2013.10～2013.11	オーロラ州	台風緊急支援プロジェクト	
2013.11～2015.11	フィリピン 南カマリネス州、イロイロ州、東サマル州、レイテ州等	フィリピン台風 30 号緊急・復興支援	
2014.7～2014.10	フィリピン 南カマリネス州	フィリピン台風 9 号緊急・復興支援	
2014.8～2015.2	ネパール シンドゥパルチョーク郡	地滑り災害緊急支援	

支援年	地域	プロジェクト名・内容	助成等
2014.12～2015.5	フィリピン 東サマール州	フィリピン台風 22 号・23 号緊急・復興支援	
2014.12～2015.6	ギニア共和国 キンディア州、コナクリ州	エボラ出血熱緊急支援	
2015.4～2017.9	ネパール シンドウバルチョーク郡、ラメチャップ郡	ネパール大地震緊急・復興支援	
2015.10～2016.3	フィリピン イサベラ州、オーロラ州、ヌエバピスカヤ州	フィリピン台風 24 号緊急・復興支援	
2015.11～2017.1	シリア	シリア難民の子どもと家族への緊急支援	
2016.4～2017.8	熊本県	熊本地震への緊急支援	
2016.10～2017.3	フィリピン イサベラ州、オーロラ州、ヌエバピスカヤ州	フィリピン台風 21 号、22 号緊急・復興支援	
2016.12～2017.5	フィリピン 南カマリネス州	フィリピン台風 26 号緊急・復興支援	
2016.12～2017.11	フィリピン	パス・イット・バック〜タグラグビーで子どもの成長を支えるプロジェクト	
2017.11～2018.10	ネパール シンドウバルチョーク郡	教室改善と学校安全計画強化プロジェクト	
2017.12～2018.2	フィリピン 東ミサミス州	フィリピン台風 27 号への緊急支援	
2018.4～2026.3	ネパール シンドウバルチョーク郡	「子どもの安全と保護のための子どもにやさしい学校」能力強化プロジェクト	
2018.5～2018.10	フィリピン	青少年を主体とした地域防災普及活動のリーダー養成研修事業	
2018.6～2018.11	フィリピン カビテ州	医療保健統合支援プロジェクト	
2018.10～2019.1	フィリピン イサベラ州	フィリピン台風 26 号への緊急支援	
2018.11～2022.2	ネパール シンドウバルチョーク郡	災害に強い学校づくりプロジェクト	外務省 NGO 連携無償資金協力
2019.9～2019.12	ベトナム ホアビン省	パス・イット・バック・プログラム	
2019.10～2022.3	長野県	令和元年台風 19 号被災者支援	
2020.4～2025.3	ベトナム ホアビン省、カオバン省	母子手帳で守る お母さんと子どもの健康プロジェクト	
2020.6～2020.9	ネパール シンドウバルチョーク郡	新型コロナウイルス対応事業	
2021.4～2022.3	フィリピン	地域で支える コロナ禍の子どもの保護プロジェクト	
2021.5～2022.1	スリランカ ヌワラエリヤ県	新型コロナウイルス対応事業	
2021.7～2023.6	ラオス フアバン県	障がいをもつ子どもへの教育環境改善プロジェクト	
2021.11～2022.10	インドネシア 西ジャワ州	安全な学校づくりプロジェクト	
2022.2～2025.3	ネパール ゴルカ郡	少数民族などの子どもの未来を開く 子どもにやさしい学校づくりプロジェクト	外務省 NGO 連携無償資金協力
2022.2～現在	ウクライナ、モルドバ	ウクライナ国及び周辺国緊急支援事業	
2022.4～現在	日本	外国にルーツをもつ子ども支援プロジェクト	
2022.8～2024.4	スリランカ ヌワラエリヤ県等	スリランカ中古自転車支援事業	
2023.2～2023.6	スリランカ ヌワラエリヤ県、プッタラム県	スリランカ 経済危機対応支援	
2023.2～2024.3	シリア国、アレッポ県	トルコ・シリア大地震緊急支援	
2023.4～2024.3	フィリピン	OSEC をなくすプロジェクト	
2023.4～2024.3	ネパール	安全な移民事業	
2023.10～現在	パレスチナ ガザ地区	パレスチナ・ガザ緊急支援	
2025.3～現在	フィリピン 南ダバオ州	山間に住む少数民族の保健医療アクセス改善事業	外務省 NGO 連携無償資金協力

支援チャイルド数

※スポンサーシップ・プログラムで支援を受ける子どもの人数

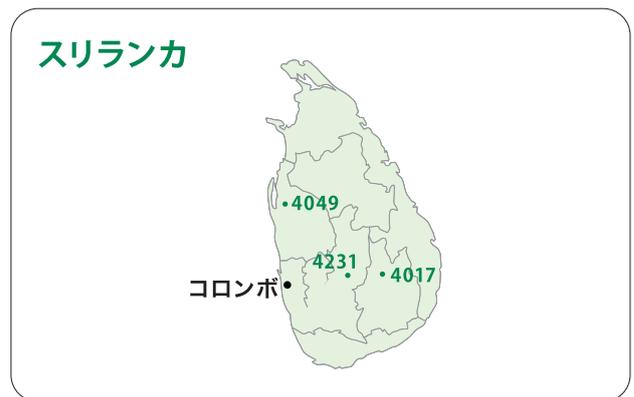
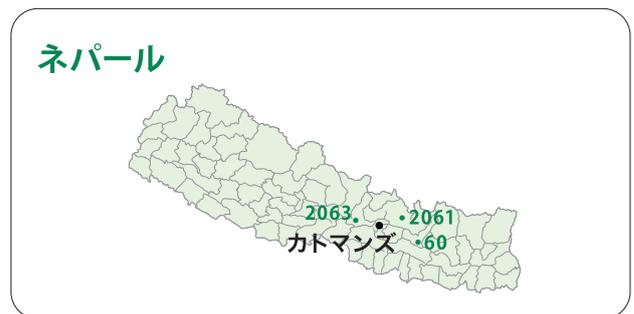
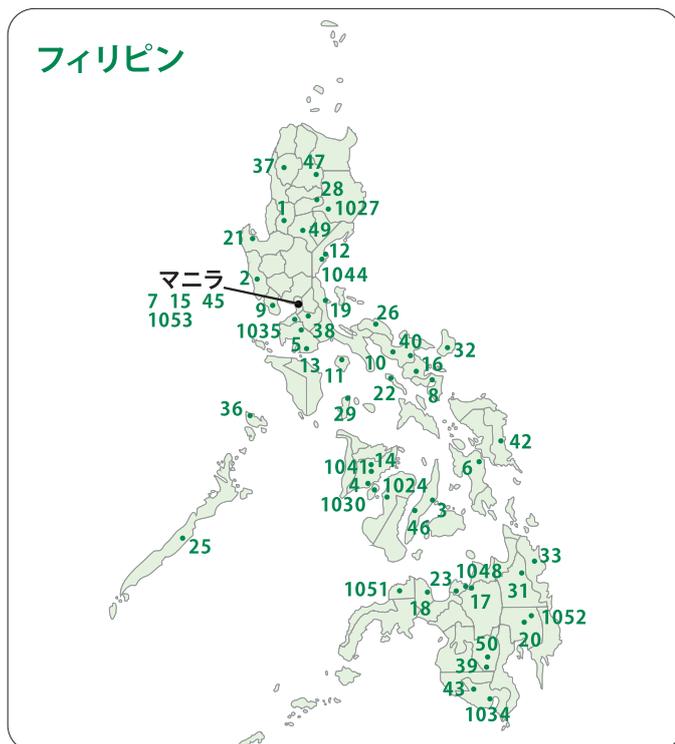


支援地域

※スポンサーシップ・プログラムでの支援地域



※それぞれの数字は支援地域を示す番号



**特定非営利活動法人
チャイルド・ファンド・ジャパン
50周年記念誌**

発行日: 2025年10月11日
特定非営利活動法人 チャイルド・ファンド・ジャパン
〒167-0041 東京都杉並区善福寺2-17-5
TEL 03-3399-8123
E-mail inquiry@childfund.or.jp
URL <https://www.childfund.or.jp/>

